

第10回レビー小体型認知症研究会 開催にあたって

1976年から1990年の一連の私たちの研究報告で提唱してきたレビー小体病・びまん性レビー小体病が1995年にイギリスで開催された第1回国際カンファレンスを機に国際的に承認されるようになったDLBについては、2003年の第3回国際DLBワークショップの報告（2005年のNeurologyに報告）で現在も使用されているDLB診断基準の報告以来、臨床診断も可能になり、さらに国際的に知られるようになりました。

2006年に私が第4回国際ワークショップを横浜で開催し、その翌年の11月初めに新横浜で第1回レビー小体型認知症研究会を開催して以来、毎年11月に新横浜でこの研究会を開催してきました。第2回の時に、DLB家族会を結成し、それ以来、この研究会では毎回午前中に家族会を行い、ランチョンセミナーを挟んで、午後からはDLBについての研究会を行ってきました。

このDLB研究会も今年で10周年を迎えることになりました。昨年の会で、DLB家族会がDLBサポートネットワークと改名し、全国の都道府県にそれを設置するように努力してきた、現在では19都道県にDLBサポートネットワークが設置されています。今回は午前中にDLBサポートネットワークの全国総会を開催することになっていますが、この会ではその代表者とDLB専門医がセットとなり話し合っ
て進めていくという形をとっており、この点がこの研究会のユニークなところ
です。ランチョンセミナーを挟んで、午後には専門的なDLBの研究会を開催します。そういう意味でこの研究会は世界でもユニークな会であると自負しています。

さて、今回は、昨年の12月初めにフロリダで開催された国際DLBカンファレンスの話題を中心に、DLBの最新の知見についての紹介を兼ねたシンポジウムを計画しました。さらに、その後10周年記念懇親会を開催いたしますので、多くの方々に参加いただければ光栄であります。

2016年11月5日
代表世話人◆小阪憲司

PROGRAM

9:30～11:45

レビー小体型認知症サポートネットワーク全国交流会

11:30～12:00

レビー小体型認知症研究会世話人会 [40F・羽衣]

12:15～12:30

レビー小体型認知症研究会総会

12:30～13:30

ランチョンセミナー「レビー小体型認知症サポートネットワークと医療の連携」

座長◆鶴飼克行 [総合上飯田第一病院 / DLBSN 愛知]

演者◆藤井博子 [DLBSN 神奈川] / 眞鍋雄太 [DLBSN 東京]

13:40～

シンポジウム「DLBの最新情報をめぐって——2015年12月のDLB国際会議の報告を兼ねて」

座長◆小阪憲司 [クリニック医庵センター南] / 池田学 [大阪大学]

13:40～14:30

演題1「DLB国際会議の概要——新しい診断基準をめぐって」

小阪憲司 [前掲]

14:30～15:20

演題2「DLBの治療をめぐって」

池田学 [前掲]

15:20～15:40

コーヒーブレイク

15:40～16:30

演題3「DLBの画像所見について——特にMIBG心筋シンチ」

山田正仁 [金沢大学]

16:30～17:00

総合討論

17:00

閉会の挨拶

岩坪威 [東京大学]

17:30～19:00

10周年記念懇親会

ランチオン セミナー

後援◆エーザイ株式会社

座長◆
鵜飼克行
[総合上飯田第一病院]

演者◆
藤井博子
[DLBSN神奈川]

眞鍋雄太
[DLBSN東京]

ランチオン セミナー

レビー小体型認知症サポートネットワークと医療の連携

藤井博子 [レビー小体型認知症サポートネットワーク神奈川代表]

近年認知症の中にもいくつかの種類があり、DLB もその中の 1 つである。いろいろな症状を伴い、対応が難しいなど多くのことが一般に知られるようになってきた。

高齢化が著しく進む中、増える患者数に対し DLB を理解し診断名をつけられる専門医の数や家族がどう対応すべきかを指導・アドバイスできる専門職の数は全く見合わない。患者とその家族は不安をかかえ進行する病状と戦いながら時を送る。努力が我慢に変わり、笑顔や思いやりが少しずつ消えていく。

このようなことは病状を同じくする患者本人と家族のみが共感できうる。DLBSN は（診断できる医師、専門職を備え）その思いや戸惑いの 1 つ 1 つをともに受け止め、話し合い、助けあって、一步を踏み出し、消えかけた笑顔と思いやりを長く keep できる一助となる活動を目指す組織である。

眞鍋雄太 [横浜新都市脳神経外科病院内科認知症診断センター部長／藤田保健衛生大学救急総合内科／レビー小体型認知症サポートネットワーク東京顧問]

Kosaka らにより瀰漫性レビー小体病（DLBD）として提唱された疾患は、今や第二の認知症、レビー小体型認知症（DLB）として知られるようになった。また、臨床的な表現型に差異は認めるものの、パーキンソン病および認知症を伴うパーキンソン病（PD/PDD）、DLB は神経病理学的研究や分子生物学的研究等の知見から、同一スペクトラムの疾患としてレビー小体病（Lewybodydisease: LBD）に内含されると理解されるに至った。とはいえ、神経変性疾患および認知症性疾患に関連する各学会の専門医は別として、多くの非専門医における疾患理解度はまだまだ低いレベルにあると言わざるを得ない。演者自身、講演会等の機会を利用して医療受給者側と意見交換することがあるが、医療者側の理解不足に起因すると思われる誤解や混乱を感じざるを得ない。

こうした中、患者および介護者、ケア職、医療者（専門医だけでなく掛かり付け医、歯科医師、薬剤師、看護師）間における双方向性の意見交換を行うことで疾患の理解を深め、介護疲労を緩和し、よりよい医療や介護環境の提供をもたらす場としてレビー小体型認知症サポートネットワーク（DLBSN）は組織された。患者団体といえば、往々にして医療職側とは対立しがちであるが、本会の場合、専門医が各組織に深く関与し、双方向の意見交換から得られたプロダクトを日々の診療にフィードバックしようという前向きな取り組みを行っていることがポイントである。一例を挙げると、誤認に基づく被害妄想と幻聴を訴え認知症病棟へ入院している A さん。主治医（精神科）は DLB を疑っているが、同院で確定診断に至る検査は施行出来ず、診断保留のまま数カ月経過している。DLBSN 東京の交流会に参加した家族からは、経過説明の後、どうしたら診断が確定し適切な治療を受けるに至るのかと質問があった。このケースの場合、高次医療機関への転院を DLBSN 東京が橋渡しすることで、良好な転機を迎えることとなった。

参加者の知識の向上、潤滑な医療や介護のサポート。例えば医療者－非医療者間の意志疎通を助け、双方に生じかけている感情的対立の緩和を図る。利用している入所施設での重点介護ポイントを整理する、患者の現状に応じた施設選定をアドバイスする。このように、DLBSN とは、ともするとトラブルケース化することが多い認知症医療および介護にあって、具体的な事例検討を通じてトラブルシューターとしての役割も併せ持つものとする。

当日は、実例を挙げつつ医療現場への DLBSN 関与の利点等を講演する。

シンポジウム

DLBの最新情報をめぐって
—2015年12月のDLB国際会議の
報告を兼ねて

座長◆
小阪憲司
[クリニック医庵センター南]

池田学
[大阪大学]

演題

1

DLB国際会議の概要——新しい診断基準をめぐって

小阪憲司 [クリニック医庵センター南]

1976年以降、1990年の小阪らの一連の報告により、びまん性レビー小体病 (diffuse Lewy body disease)、レビー小体病 (Lewy body disease) の提唱が行われ、それらを基礎として、1996年の第1回国際ワークショップの報告 (Neurology) により DLB (dementia with Lewy bodies) という病名とその診断基準が国際的に報告され、2005年の第3回国際ワークショップの報告により、現在使用されている臨床診断基準が提唱された。

筆者は2005年に第4回 DLB 国際ワークショップを横浜で開催し、翌年の2006年から毎年11月に新横浜にて DLB 研究会を開催し、第2回研究会の時に DLB 家族会を設立し、以降毎年の DLB 研究会では午前中に DLB 家族会を、ランチョンセミナーをはさんで、午後には DLB 研究会を開催してきた。DLB 家族会は2015年の研究会の時に DLB サポートネットワークに名称を変え、全国の都道府県にそれを結成し、現在は北海道から九州まで19都道府県にそれが設立されている。これは代表と DLB のわかる顧問医により主催され、活発に活動されている。

現在では DLB は AD に次いで2番目に多い認知症で、認知症の約20%を占めており、わが国では AD に次いで2番目に多い認知症として知られるようになった。これは国際的にも同じで、国際会議もその後、ワシントン、ドイツに続いて昨年12月にはフロリダで開催され、最近の知見も活発に議論された。

ここでは、現在投稿中の新しい診断基準を中心に簡単に紹介することにする。

演題

2

DLBの治療をめぐって

池田学 [大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室]

レビー小体型認知症（DLB）は、コリンエステラーゼ阻害薬の開発当時から、神経病理学的知見などに基づきアルツハイマー病よりも効果が期待出来ると考えられてきた。しかし、薬剤に対する過敏性や認知機能の変動、治療効果判定の難しさから、ようやく 2014 年に世界で初めて日本において、アリセプトが効能・効果の承認を受けた。本講演では、演者も加わった第 II 相並びに第 III 相試験の結果を詳述すると共に、これらの試験で明らかになった今後の課題についてまとめる。また、認知機能障害以外に、神経症状、ならびに精神症状も高頻度に出現する DLB の包括的な治療戦略を議論してみたい。さらに、病態修飾薬開発と先制医療の可能性について、アルツハイマー病など他の変性疾患における開発状況とも比較しながら検討を試みる。非薬物療法に関しては、DLB に高頻度に出現する BPSD に対する介入の試みを紹介してみたい。

演題

3

DLBの画像所見について——特にMIBG心筋シンチ

山田正仁 [金沢大学大学院脳老化・神経病態学 (神経内科学)]

Lewy 小体型認知症 (DLB) では、 α シヌクレインが蓄積する Lewy 関連病理の出現に伴いシナプス・神経細胞の機能不全・死が起こる。その病変進展様式は中枢及び末梢神経系を含み多様である。さらに、DLB は Alzheimer 病 (AD) 病変をしばしば随伴する。そうした病態の解析や診断に各種画像検査が用いられる。

それらには、①形態画像 (CT、MRI: 内側側頭葉が比較的保たれる)、②脳代謝・血流画像 (FDG-PET、脳血流 SPECT: 後頭葉の代謝・血流低下、FDG-PET における cingulate island sign)、③神経伝達画像 (ドパミントランスポーター (DAT) イメージング、MIBG 心筋シンチなど: 大脳基底核における DAT 取り込み低下、心筋 MIBG 取り込み低下)、④蓄積タンパク質のイメージング (α シヌクレインイメージング (開発中)、アミロイド PET、タウ PET (開発中)) が含まれる。DLB の本態を検出する④の α シヌクレインイメージングの開発と実用化が待たれる。

③の DAT イメージングと MIBG 心筋シンチは DLB の診断マーカーとして有用である。現在使われている国際ワークショップ DLB 臨床診断基準改訂版 (McKeith et al. Neurology 2005) において、DAT イメージングは“示唆的特徴 (suggestive features)”に位置づけられ、一方、MIBG 心筋シンチは、それより一段低い、①や②と同じ位置の“支持的特徴 (supportive features)”に位置付けられていた。心筋の MIBG 取り込み低下は Lewy 関連病理によって引き起こされる交感神経節後神経病変のマーカーであり、AD など他の認知症疾患では通常みられない。

MIBG 心筋シンチの有用性を確立するため、2015 年までに、演者らのグループは、(1) MIBG 心筋シンチ検査の標準化に成功し、(2) 世界初の多施設研究においてその高い診断特異度を示し、さらに織茂らのグループは、(3) 剖検例研究において病理学的なエビデンスを示した。それらの成果を

2015 年 12 月にフロリダで開催された国際 DLB カンファレンスで発表し、MIBG の診断基準上の位置付けのアップグレードを主張した。その結果、MIBG が DAT イメージングと少なくとも同等の診断的価値を有することは広く受け入れられ、本カンファレンスのトピックとして認知症ウェブサイト“ALZFORUM”にも取り上げられた (<http://www.alzforum.org/news/conference-coverage/through-heart-cardiology-tracer-nail-dlb-diagnosis>)。そうしたコンセンサスに基づき改訂された新しい診断基準が近く公表される見通しである。

世話人会

代表世話人

小阪憲司

副代表世話人

水野美邦 岩坪威

世話人

朝田隆	天野直二	新井平伊	池田学	井関栄三	岩田誠
内門大丈	内海久美子	小田原俊成	織茂智之	川口哲	木之下徹
葛原茂樹	篠遠仁	東海林幹夫	城間清剛	田北昌史	坪井義夫
中島健二	長濱康弘	布村明彦	羽生春夫	福井俊哉	堀口淳
前田潔	眞鍋雄太	水上勝義	水谷智彦	三村将	村山繁雄
森悦朗	山口晴保	山田正仁	吉岩あおい	梁正淵	

監事

鵜飼克行 都甲崇

賛助会員

エーザイ株式会社メディスン開発センター日本クリニカルサイト
エーザイ株式会社メディカル本部育薬企画部
エーザイ株式会社アリセプト部
株式会社ツムラ製品戦略本部
株式会社ツムラ育薬企画部
Meiji Seika ファルマ株式会社
エフピー株式会社医薬情報部
富士フイルム RI ファーマ株式会社学術企画部
日本メジフィジックス株式会社
ノバルティスファーマ株式会社中枢神経部
小野薬品工業株式会社
第一三共株式会社医薬営業本部マーケティング部第三グループ
大日本住友製薬株式会社開発本部臨床企画部特定領域企画グループ
大塚製薬株式会社医薬品事業部メディカル・アフケア部
クラシエ薬品株式会社
ヤンセンファーマ株式会社 CNS 事業本部レミニールマーケティング部
チャートウェルヘルスケア株式会社（香港）
一般社団法人総合ケア推進協議会
大和プレス株式会社
大同工業株式会社
浅羽医学研究所附属岡南病院
久保田裕
下村順子

寄附

エーザイ株式会社 [ランチョンセミナー後援]
富士フイルム RI ファーマ株式会社



2016年11月5日発行

レビー小体型認知症研究会

〒214-0021 神奈川県川崎市多摩区宿河原6-19-26-405 株式会社harunosora内

FAX044-330-1744

office@d-lewy.com

<http://www.d-lewy.com>